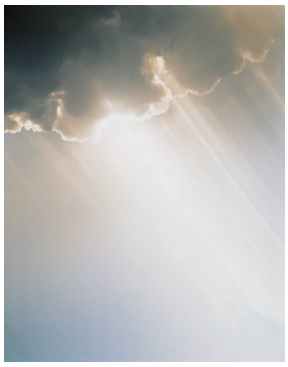
西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.65　2011年1月号

先月は坂本龍馬の話でしたから、今月は司馬遼太郎さんの代表作のひとつというつながりで、「坂の上の雲」についてです。特に経営者の方々にはこの作品のファンが多く、去年からはNHKでドラマも始まっていますのでいまさら説明する必要もないでしょうけど、日露戦争を扱った作品です。

それまで約３００年間続いた徳川幕府が明治維新によって倒れ、日本人は初めて近代的な「国家」というものをもったと司馬さんはいいます。ところが、これも司馬さんがいうように、じつにこっけいなことに、米と絹のほかには主要産業のないこの百姓国家の国民が、ヨーロッパの先進国と同じように陸軍や海軍を持とうとしたものですから、財政のなりたつはずもありません。でも、この近代国家をつくりあげるということは、明治維新後の国民たちの少年のような希望だったといいます。やがてこの少年たちの痛々しいばかりの昂揚感は食うものも食わず、明治維新から４０年足らずで、うそのように小さい陸軍と海軍をつくりあげます。ところが、この小さな陸軍と海軍は当時世界最強といわれたロシアのバルチック艦隊をせん滅し、これまた陸軍最強といわれたロシアのコサック騎兵をやぶるという奇跡をなしとげます。すべては欧米諸国に追いつこうとひたむきに努力した日本人がなしとげたことですが、なにか、今の日本人が失ったものをこの時代の日本人に見る思いがしてしまいます。

この作品では、「男子は生涯一事を成せば足る」など、数々の名言が出てきますが、私が好きなのはこの作品のタイトル「坂の上の雲」の由来です。「（明治という時代の）時代人としての体質で、前をのみ見つめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朶（いちだ）の白い雲がかがやいているとすれば、それのみをみつめて坂をのぼってゆくであろう。」

生前、戦争賛美になることを恐れて、司馬さんはこの作品の映像化を許可しなかったそうです。確かに、戦争そのものはその結果も含めて賛美されるべきものではありません。でも、何かに向かってわきめもふらず真剣に、そしてひたむきに努力する姿には、感動せずにはいられないと思うのですが、みなさんはどう思いますか？